

2010年 【古典を読むー歴史と文学ー】 「いま明かされる古代26」 概要

第1回 10月9日（土） 午後2:30～4:30

東北大学名誉教授

今泉 隆雄 先生 「**仙台郡山遺跡と東北古代史**」

概要

仙台郡山遺跡は仙台平野中央部にある地方官衙遺跡であり、7世紀半ば～8世紀初めの間、はじめは蝦夷を支配する城柵、次いで陸奥国全体を支配する陸奥国府であり、この時期の東北古代史を考えるために重要な遺跡である。郡山遺跡の発掘調査の成果は、これまで史料が少なくて不明であったこの時期の陸奥国の歴史を明らかにしてくれる。郡山遺跡の概要を紹介しながら、謎の多いこの時期の東北古代史について述べてみたい。

第2回 10月23日（土） 午後2:30～4:30

奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館 総括学芸員

岡林 孝作 先生 「**初期王墓の実態解明に向けて**」
—**桜井茶臼山古墳の発掘調査から**—

概要

奈良盆地東南部に多数築かれた前期古墳の中でも、箸墓古墳をはじめとする最大クラスの6古墳は、古墳時代初期の歴代王墓（大王陵）の最有力候補です。そのうちの1基である桜井茶臼山古墳が昨年発掘調査され、通常の前期古墳をはるかに凌駕する、驚くべき内容の一端が明らかにされました。墳丘、埋葬施設、副葬品、墓上祭祀など、特筆すべき調査成果を紹介し、初期王墓の特質について考えてきたいと思います。

2010年 【古典を読むー歴史と文学ー】

「いま明かされる古代26」 概要

第3回 10月30日（土） 午後2:30～4:30

京都産業大学 日本文化研究所 所長・教授 京都市歴史資料館 館長

井上 満郎 先生 「神話の中の『天孫降臨』」 ー日本と韓国の神話比較ー

概要

国土と国王の誕生については、世界にさまざまな神話がある。国土・国王の誕生物語を、自分たちの民族や国家のアイデンティティとして語り継いできたからで、民族や国家の数だけその神話があるといっても過言ではない。

日本の国土は神によってつくられ、それは出産というかたちで語られる。まず神々が誕生し、その終りにイザナキ・イザナミの二神があらわれる。この夫婦神が国土、ついで海・山・川、木・草などを生み、最後に「天下に主となるもの」、つまり日の神・月の神・スサノオの三神を生む。この日の神のアマテラスがアマツヒコヒコホノニギを地上に降臨させ、これが「天孫降臨」神話と呼ばれるものである。このときに降臨を命令する神は実はタカミムスヒとする神話のほうが古体なのだが、このタカミムスヒは別に「高木神」とする史料がある。文字通りに高い樹木のことを示し、諏訪大社の御柱によく知られるように高い樹木は日本では神の依りしろとして受けとめられてきた。

ここで韓国の檀君神話が想起される。檀はまゆみの木のことで、朝鮮（古朝鮮・王倭朝鮮）の開国の祖である檀君王儉の父の桓雄が、天上から降臨したのはやはり樹木のもとであった。日本・韓国ともに樹木が関係しているが、他にも降臨地が山上であること、天の神から命令を受けていること、降臨に際してレガリア（宝器）を授けられること、など共通する内容が多い。その具体相を、主として日本神話を素材とし、韓国の神話を参照しながら考えてみたい。

2010年 【古典を読むー歴史と文学ー】

「いま明かされる古代26」 概要

第4回 11月6日（土） 午後2:30～4:30

東北学院大学 文学部 歴史学科 教授

熊谷 公男 先生 「日本古代の即位儀礼と皇位継承」 —大王の時代から平安初期まで—

概要

飛鳥時代、日本列島の君主は「治天下大王」とよばれたが、大王は即位すると亡くなるまで大王の位を退くことは決してなかった。ところが、大化改新の際に皇極天皇が弟の孝徳天皇に位を譲ったときから譲位がはじまる。譲位は世界史的にみてもきわめて変則的な王位継承の方式なのであるが、7世紀末に持統天皇が孫の文武天皇に譲位してから急速に常態化していく。さらに9世紀半ばには、それまでの慣例をやぶって幼帝が出現すると、それも常態化していく。このように古代の皇位継承は2世紀ほどの間にめまぐるしく変化していった。さらにその間には、即位儀礼も大きく変化するし、朝廷での政務形態（朝政）も大きく変貌する。これらはいずれも古代王権の変質を端的に物語るものである。そこから何が読み取れるかを考えてみたい。

第5回 11月20日（土） 午後2:30～4:30

広島大学大学院 教育学研究科 社会認識教育学講座 教授

下向井 龍彦 先生 「藤原純友の乱の虚像と実像」

概要

藤原純友は、長い間、10世紀前半に瀬戸内海を荒らし回った海賊の首領といわれてきました。彼は、社会から脱落した暴徒を組織して掠奪をほしいままにした、悪逆非情の乱暴者か。はたまた、颯爽と権力に立ち向かった反体制の英雄か。あるいは、瀬戸内海運を握り東シナ海に雄飛する夢を抱いた風雲児か。純友と聞いて、そんなロマンを掻き立てられる方もいらっしゃるでしょう。

しかし私は、そのような歴史ファンの期待に応えるような純友像を提供することはしません。私が語ろうとする純友は、10世紀前半の政治的世界のなかで、自己の「勲功」に相応する正当な地位を求めながら志し半ばで倒れた、登場したばかりの一人の「武士」の、痛ましい姿なのです。

2010年 【古典を読むー歴史と文学ー】 「いま明かされる古代26」 概要

第6回 12月11日（土） 午後2:30～4:30

専修大学 文学部 歴史学科 教授

荒木 敏夫 先生 「斉明女帝論」ー王権研究の視点からー

概要

推古に次いで二人目の女帝として即位した皇極女帝は、大化のクーデターで弟の孝徳に譲位したが、孝徳死後に、斉明女帝として再び大王の位についている。

斉明の事績を伝える『日本書紀』の記載は、不可思議な記事に満ちており、これまで、それらは史実とみなすことはできないとされ、その実像に迫るのは困難と考えられてきた。しかし、近年の発掘調査による新知見の蓄積とそれらも視野に入れた王権論からの見直しにより、新たな展望を得ることができるようになってきている。今回も前回と同様に、王権論の視点から斉明女帝を再評価し、その歴史的意義を明らかにしたいと思います。

第7回 1月15日（土） 午後2:30～4:30

奈良県立橿原考古学研究所 所長 滋賀県立大学名誉教授

菅谷 文則 先生 「戸隠神社蔵の通天牙笏と正倉院の通天牙笏」

概要

通天牙笏という名称は、正倉院の国家珍宝帳に記されている名称で、中国の古典には管見にして見出していない。板目状の象牙の筋目を強調した象牙取りによって作製された笏板は、正倉院の1枚と、戸隠神社の1枚のみである。この両者は奈良東大寺と信州戸隠神社に別々に伝わったものであるが、わたしは双子の笏板ではないかと考えています。そうすると、古代信濃と飛鳥・藤原・平城の首都と深い結びつきがあったことを知ることができます。